鹿児島カトリック教区報

〒892-0841
鹿児島市照国町13-42
カトリック鹿児島司教区
電話099（226）5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行　教区広報部
1部60円年間〒共1100円

道標

洗礼の恵みに気づき、それを生きよう(5)

2024年　年間目標

鹿児島教区司教　中野裕明

教区の皆さま、お元気でしょうか。

今回は聖霊と洗礼の関係についてお話しします。

私たちは、5月19日に聖霊降臨の祭日を祝います。復活節はこの日をもって終わります。

実は、主の復活から聖霊降臨までの50日間は受洗者にとって、とても大切な期間であります。それは典礼神学上、ミスタゴジアと命名されている期間だからです。すなわち「新しく神の子とされた新信者が、その身分がどのような意味を持つのかを体得する期間である」ということです。

平たく言うならば、ある人が養子縁組で、新しい家族の一員になったようなものです。その人は、これまでとは異なる価値観を持つ新しい世界を経験することになります。

ここで大事なことは、新信者さんは、これから神の家族のメンバー、すなわち、「父である神」、「子である神」、「聖霊である神」について、また勿論「聖母マリア」についても深く知ることになります。しかし、これらは生涯にわたって知ることになるので、受験勉強のようなやり方で学ぶのではありません。毎週、主日のミサに参加することによって自然に体得するのです。

話を聖霊降臨までの50日間に戻します。復活節に朗読される福音に注目してください。

復活節第2主日では、復活したイエスが復活の第一の実りである罪の赦しのための聖霊を弟子たちに送ります。

第3主日では、聖書が示しているイエスとミサの中で出会えるイエスについて学びます。

第4主日では、羊のために命を捨てる善き牧者であるイエスの姿が語られます。

そして第5主日には、ぶどうの幹とその枝の密接な繋がりがそのままイエスと私たちの繋がりであることを学びます。

つまり、復活節に読まれる福音書は、新信者が神の家族のメンバーの一員として、イエスをよく知り、愛せるようにと勧告しているのです。

神の家族についてもう少し深堀りします。

イエスは次のように言います。

「私を愛する人は、私の言葉を守る。私の父はその人を愛され、父と私はその人の所へ行き、一緒に住む」（ヨハネ14・23）。

この言葉はとても不思議に思われます。

地上の生活の時、イエスと弟子たちの関係は、師弟関係でした。ガリラヤ生まれで漁師だった弟子たちは、イエスの魅力に引かれて、イエスの弟子になりました。ところが、その師弟関係が一変したのは、イエスの復活後です。

先のイエスのことばは、生前弟子たちに向けられたものですが、その前に、次のような不思議なことを話しています。

「あなたがたが私を愛しているならば、私の戒めを守るはずである。私は父にお願いしよう。父はもうひとりの弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。この方は、真理の霊である。世はこの霊を見ようとも知ろうともしないのでそれを受けることができない。しかし、あなたがたは、この霊を知っている。この霊があなたがたのもとにおり、これからも、あなたがたのうちにいるからである」（同上15～17節）。

日本人の間では、守護霊の存在が取りざたされています。写真上の人物の背後にかすかに浮かび上がっている影を指しているようです。

しかし、イエスが言うところの霊は、ご自分の「弁護者」であり、「真理の霊」であるなど、その性格を明確にしています。

さらにイエスは続けます。

「私はあなたがたのもとにいる間、これらのことを話した。しかし、弁護者すなわち、父が私の名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、私が話したことをことごとく思い起こさせてくださる」（同上25～26節）。

つまり、イエスの弁護者、真理の霊とは、聖霊の事だったのです。

今回のお話は、聖霊と洗礼の関係についてでした。

ところで、5月は聖母月です。私たちと同じ人間であられるマリアは、聖霊によって神の子イエスを宿されました。そして、同じ聖霊降臨の時、マリアは弟子たちと共にいました。

教会の誕生日である聖霊降臨の日、新信者は、父である神、子である神、神の母である聖母を頂く家族の一員であることを喜んで自覚するのであります。

司祭には揺るがない心が必要

聖香油ミサで中野司教

3月26日（火）午前11時から鹿児島カテドラル・ザビエル教会で「聖香油ミサ」がささげられた。

司祭職制定を記念し、聖香油、病者のための油、洗礼志願者のための油を聖別、祝別するこのミサは、本来なら聖木曜日にささげられるものだが、離島の多い鹿児島教区では聖週間の典礼を考慮し、2日前の火曜日での実施としている。

この日のミサには鹿児島教区で働く司祭たちのうち24人と郡山健次郎名誉司教、終身助祭4人が駆けつけた。信徒の参加は約60人だった。

石神秀人助祭のルカ福音書朗読後に説教した中野司教は、司祭職制定について触れ、「イエスは福音を伝えるために12使徒を選んだ。そしてこの使徒たちが教会の核となった。これは司教のことである」と明言した。その上で司教、司祭の持つ祭司職、王職、預言職について旧約時代にまで遡って説明した。

また司教に寄せられた教会に対する誤解を持ってしまった信徒の手紙から、「現代は真実が分かりづらい、通りづらいものとなっている。これにはマスコミの偏った、操作された情報の影響も大きい。私たちの信仰はアクセサリーではない。だからいつも神の眼差しがどこに向いているのかを突き詰めなければならない。これは信徒にとっても大切なことだが、教会の核である司祭たちには特に気をつけてほしい。核が揺らいではだめだ」と結んだ。

「聖香油」聖別の祈りで按手する司祭たち

中野司教の説教後に、集まった司祭たちは「言葉と秘跡によって与えられた使命を果たすことができるように」と司祭の約束を更新した。その後は司祭のために「キリストに結ばれて人々を導くことができるように」、司教のために「よい牧者となり、すべての人に仕えることができるように」と祈りがささげられた。

このミサでは第三奉献文が使用されたが、奉献文を唱え終わるとまず「病者のための油」が祝別され、その後、拝領祈願が唱えられてからは「洗礼志願者の油」が祝別され、そして司教が息を吹き込み、全司祭が手をかざして祈りがささげられて「聖香油」が聖別された。

ミサの終わりには、新しく主任司祭として任地に向かう栃尾泰英神父、鈴木康由神父、朴鎭亮神父、ファン・ミン・アン神父が司教の前に進み出て信仰宣言し、また福音書に手を触れながら教会法に則り、財産管理や信仰の遺産を守ることなど主任司祭としての務めを果たす旨を宣誓し、その書面にサイン、その後司教から任命書が手渡された。また指宿教会管理者から大熊教会管理者への異動となる郡山名誉司教も任命を受けた。

3月のコンベンツス

3月26日（火）、聖香油ミサ後に昼食を挟んで教区本部会議室でコンベンツスが開かれた。

今回の議題は集会祭儀司会者養成講座についての質疑応答と教区内役職及び担当の確認が主であった。また3月上旬にあった「日本におけるシノドスのつどい」に出席した中野司教と内野洋平神父が同会の感想を分かち合った。

シドティ神父の故郷を巡る(3)

事務局長補佐・枕崎教会　長野宏樹

シドティ神父（1708年10月に屋久島に上陸し、その後江戸のキリシタン屋敷で衰弱死）生誕地シチリア巡礼記の最終回。

1621年12月、品川の札の辻で火刑に処せられたアンジェリス神父の故郷・エンナやシドティ神父の足跡が数多く残るパレルモを訪ねました。

4．エンナ

エンナはシチリアの中央高地（標高950m）にある古都です。ここでは毎年デ・アンジェリス神父の生涯を讃え、12月5日に「福者デ・アンジェリス祭」が開催されており、この日に合わせて今回の巡礼の日程が組まれました。

アンジェリス神父は1568年この地で生まれ、パレルモのイエズス会学院に入学し、卒業と同時にイエズス会に入会しました。そして天正の少年使節のローマ訪問の影響を受け、日本への宣教熱に燃え、日本への途上のマカオで叙階して1602年に長崎に上陸しています。

日本では大阪、京都、四国、東海、関東を司牧していました。1614年には「伴天連追放令」が出されますが、彼は日本残留に成功し、津軽の流刑者たちの慰問を行い蝦夷地まで足を延ばしています。

1621年に江戸赴任を命ぜられたのですが、ついに自ら出頭して捕縛され、12月4日、50人の神父や信徒と一緒に品川の札の辻で火刑に処せられました。彼の頭蓋骨は信徒が命がけで拾い、それがマカオ経由でエンナに戻り、現在はバルトロメオ教会に保管されています。

アンジェリス祭ではアンジェリス像と聖遺物が掲げられます。それらは消防団員に担がれ、バルトロメオ教会からエンナ大聖堂まで、祈りと聖歌の声に包まれながら行列しました。そしてそこでミサが捧げられました。

ミサ後は大聖堂の周りで花火が打ち上げられました。先方からは日本での記念祭の模様を知りたいとの要望がありましたので「江戸の殉教祭」や北海道の「千軒岳殉教記念祭」の写真が奉納されました。

アンジェリス祭に参加した日本からの巡礼団

5．パレルモ

パレルモはシチリア最大の町です。ここはシドティ神父の足跡が多く残る場所。シドティ神父は単身屋久島に上陸し、江戸で新井白石の取り調べを受けました。新井白石が著した「西洋紀聞」にその様子が記載されています。

中野司教からのメッセージを手渡す

大司教と記念撮影

今回の巡礼でシドティ神父の列福運動の中心地のパレルモ大聖堂で我々の巡礼団のために大司教主催のミサがささげられることが分かったので、中野司教にお願いし大司教宛のメッセージを作成していただいたのでミサの時献上しました。

今回の日本からの巡礼団が初めての訪問だったので、今後相互の巡礼団訪問が実現すれば、シドティ神父の列福審査もスムーズに進むのではと思いました。

ミサ後、午後はフリータイムでしたので、巡礼のキーメンバーで巡礼手続きの総責任者であるマリオ・トルチヴィア神父と面談し、情報交換と課題について話し合いをすることができ、有意義な会談となりました。

6．所感

今回の巡礼を通して感じたことは、日本でも毎年殉教祭が開催されていますが、どうしても大勢の殉教者をまとめて記念しているためグループとしての話はよく聞きますが、そのメンバー一人ひとりがどのような活動を行ったかは意外と知られていません。各人の人生、とくに宣教活動について知る必要があることに気づかされました。

今後、地元シチリアからも日本への巡礼が増えると思いますが、どのような受け入れ方をすればよいか検討していきたいと感じた次第です。（了）

イグナチオの霊操⑪

紫原教会主任司祭　貴島丈弥

第1週(2)

第2の霊操で願う望みは、自分の罪に対しての深い痛悔と涙の恵みです（55）。

要点としては、自分が過去に犯してしまったあらゆる罪を思い浮かべ、それらがどれだけ醜く悪質であったかを考え、その重さを熟考します。そのうえで、自分が何者であるかを考察します。

他人と比べて、天国の天使、聖人たちと比べて、神と比べて自分が何者でありうるのか。そして、朽ちていく自分の肉体の醜さ、そこから出たおびただしい数の汚れた罪と醜い悪事を思い浮かべます。

その自分がなぜ生き延びさせてもらい、守ってもらっているのかを神と聖人たちを思い浮かべながら考察し、神さまとの対話の中で、語り合い、感謝し改心を心掛け、主の祈りで締めくくります（56―61）。

第3霊操は第1と第2の反復で、三つの対話が行われます。

マリアさまとの対話、御父にとりなして下さる御子との対話、そして御父との対話で自分の罪、世俗的なことを忌み嫌う恵みを願います（62―63）。

第4霊操が第3の総括で心に残ったことを思いめぐらせます（64）。

第5霊操が地獄の黙想と言われています。

五つの要点を引用したいと思います。

第1要点は「想像の目で、激しい炎、および火の体の中にあるかのように魂を見」、第2要点として「耳で、泣き声、悲鳴、喧噪、わが主キリストと諸聖人に対する冒涜の言葉を聞」き、第3に「嗅覚で、煙、硫黄、汚水溜や腐敗した物を嗅」ぎ、第4要点で「味覚で、涙、悲しみ、良心の呵責のような苦い物を味わ」い、第5要点は、触覚で、物に触れること。すなわち、炎が霊魂をなめ、焼き尽くすのを体験する」ための黙想をします。

最後の対話はイエスさまと交わし、罪深い自分が救われ、許され続けていることのあわれみに感謝し、感嘆します（65―71）。

第1週では、これら五つの霊操を涙の恵みがあるまで続けます。とても苦しい体験となりますが、その分、神さまの偉大で無償の愛を体験することになります。

+KABAYAN SEKSIYON+

Prusisyon ng Aklat ng Ebanghelyo

Sa simula ng pagdiriwang, sa solemneng pagpasok ng mga ministro, isa sa mga maaaring maghanda sa komunidad ay ang pagdadala ng tagabasa ng Aklat ng Ebanghelyo.

Ito ay kilos na nagpapaalala sa simula pa lamang kung ano ang nararapat pagtuunan ng pansin sa Eukaristiya: ang Salita ng Diyos na tumatawag sa atin upang magtipon at magbibigay Liwanag sa ating pananampalataya.

Ang Misal ay nagsasabi na kung ang ritong ito ay gagawin, ang Aklat ng Ebanghelyo ay ilalagay nang malapit sa altar (GRIM 22).

Hinahalikan ng obispo ang altar pagkatapos ng prusisyon sa simula ng pagdiriwang, at ang Aklat ng Ebanghelyo pagkatapos ng pagbasa ng Ebanghelyo.

Ang altar at libro: parehong nagbubunsod upang makaniig natin si Kristo-ang Salita at Pagkain sa komunidad ng Kristiyano.

Subalit ang gawaing ito ng pagprusisyon ng Aklat ng Ebanghelyo sa ibang mga simbahan ay hindi naman ginagawa o hindi kinaugalian. Kaya may mga simbahan na iba ang ginagawang liturhiya kaysa sa ibang simbahan.

Sa ganitong kalagayan, kailangan na ang lahat ng Simbahang Katoliko, kailangan pare-pareho dapat ang mga ritong ginagawa para ang lahat ng Simbahang Katoliko ay iisa lang ang nararanasan ng lahat ng mga mananampalatayang Kristiyano Katoliko. Malalaman ang pagkakaiba ng Simbahang Katoliko sa ngalan ng rito sa ibang mga simbahan na hindi Katoliko.

Totoong ang ibang simbahan na hindi Katoliko, ay gumagamit din ng Bibliya. Sa kanilang pagtitipon ay binabasa rin ang Ebanghelyo, subalit makikita natin na mayroon kulang sa kanilang pagdaraus ng kanilang pagtitipon.

Kaya sa ating napabibilang sa Simbahang Katoliko, tayo ay may mas malalim na pakahulugan ng mga ritong ginagawa natin sa loob na liturhiya na napakahalaga at napakaimportante sa buhay pananampalataya. Naka sentro ang ating liturhiya sa Aklat ng Ebanghelyo

Katesismo Tungkol sa Liturhiya (Fr.Dino Orolfo)

★聖書愛読運動「新約聖書コース」完走者

岡崎文子さん（古田町教会）、永田京子修道女（純心聖母会鹿児島修道院）、上原敏子さん（谷山教会）、武野美千代さん、網屋澄子さん、河野博さん（鴨池教会）、中野和明さん（名瀬聖心教会）、下堂薗明美さん（ザビエル教会）、春田和子さん（玉里教会）、名越幸子さん（種子島教会）※4月15日現在

ミサ時間変更　屋久島教会

屋久島教会（種子島小教区）のミサの開始時間が変わりました。これまでは第2と第4日曜日の午後5時からでしたが、今後は1時間早まり午後4時になります。

「日本におけるシノドスのつどい」に参加して

大笠利教会主任司祭　内野洋平

「日本におけるシノドスのつどい」（3月7～8日）には中野裕明司教をはじめ内野洋平神父（司祭団代表）、シスター宇田美智枝（修道者代表）、そして岩﨑正幸氏（信徒代表）が教区の代表として参加した。次号にかけて参加者による報告・分かち合いの文章を掲載する。

3月7日（木）から8日（金）の2日間にわたって、東京潮見にある日本カトリック会館を会場に、全教区から司教、司祭、奉献生活者の会、信徒による代表68人が集まり、「日本におけるシノドスのつどい」が開催されました。

昨年10月にローマで開催されたシノドス第16回通常総会（以下、総会）の第1会期を終え、また今年10月に開催予定の第2会期に向けての準備として、今回の日本におけるシノドスのつどいが行われました。

1日目のプログラムとしては、初めに日本から総会へ代表として参加された菊池功大司教より挨拶があり、今回のつどいの目的はバチカンで行われた第1会期において用いられたシノドス的教会の方向性を識別するための「霊における会話」（以下、「会話」）という考察方法を日本の教会でも体験するためのつどいであることの主旨が述べられ、続いてスタッフの担当者から第1会期のシノドスの実りとしてまとめられた報告書の優先課題のテーマについてグループごとで話し合うにあたって、その「会話」と祈りの方法についての説明がありました。

この方法はファシリテーターの司会進行のもと、祈りと沈黙、みことばに耳を傾ける時間を設けながら、第1ステップ（わたし）として自分の考えを「発言し」、相手の声に「耳を傾ける」。

第2ステップ（あなた）として相手の考えを聞いて浮かび上がったこと、響いたことについて分かち合う。

第3ステップ（わたしたち）としてグループで分かち合ったことの共通点を見極め、異なる多様な意見があってもそれを尊重してメンバー一人ひとりの声が反映されるようにまとめていくという作業方法でした。

その作業にあたっては1人の発言時間は3分と決められていることから、自分の発言をまとめておくこと（相手の意見にしっかりと耳を傾けるため）、また相手の意見を聞いて忘れないためにメモを取ることが勧められました。

この方法を用いて、6グループに分かれ、1回目となる「会話」は全体で「シノダリティー：経験と理解」という共通したテーマで「シノドス的（共に歩む）教会とはどのようなものであるか」について識別の時を持ちました。グループ作業の後、全体会議を行い、各グループ2分間の持ち時間で分かち合われたことを発表し、祈りでもって1日目の作業を終了し、夜は夕食会において参加者との交流の時を過ごしました。

2日目は、午前9時よりスタッフチームの高山徹神父（大阪高松教区）からシノドス第1会期の「まとめ」報告書についての講演があり、その後、2回目となる「会話」を行いました。

シノドスの優先課題の20項目のうちから取り上げた6つのテーマは次の通りです。

①「信仰共同体への参入：キリスト教入信」
②「教会の旅の主人公である貧しい人びと」
③「あらゆる種族、ことば、民族、国民からなる教会」
④「教会は宣教である」
⑤「教会の生活と宣教における女性」
⑥「耳を傾け、同伴する教会を目指して」

これらについて前日と同じように各グループに分かれて「会話」の作業と全体会議での発表を行い、午後からは今回の取り組みを5月15日までに教皇庁シノドス事務局に提出するための採択文書のまとめ作業を行い、集いの最後は隣接する潮見教会で感謝のミサを共に捧げて全日程のプログラムを終了し、解散となりました。

今回のシノドスのつどいで体験した「会話」と祈りによるこの識別の手法は、一人ひとりの洗礼の恵みによる信仰の感覚からもたらされる神の民としての対話と連帯を深め、一致と交わりのうちに宣教するシノドス的教会の在り方そのものを養うためにとても有益だと感じました。

各小教区で宣教司牧に励んでいる私たちが今、切実に求めていることは、共同体として福音の証しになっているかどうかではないでしょうか。

教皇様は、この「会話」と祈りを各教区においても体験し、実践してほしいと望んでおられます。

短信

▼カトリック教師の会

3月17日（日）午後3時から5時まで、鴨池教会にて栃尾泰英神父（吉野教会・吉野幼稚園（当時））の指導の下、四旬節黙想会が実施され、4人が参加した。

聖体の顕示に始まり、2回の講話と個人黙想・ゆるしの秘跡の時間がとられ、最後は聖体による祝福で終了した。

講話では御絵や絵本の紹介もあり、栃尾神父のこれまでの司祭としての様々な経験（小教区・幼稚園・ダルク・ハンセン病施設など）から多くの霊的な示唆が得られた。（報告・霧島神父）

絵本を用いて講話する栃尾神父

会と催し　5月

1日（水）中野アカデミー・教区本部・13時30分
3日（金）聖フィリポ　聖ヤコブ使徒
▼石田望神父霊名（聖フィリポ）
4日（土）盛克志神父叙階記念（1991年）
5日（日）復活節第6主日
▼世界広報の日（献金）
7日（火）みことばを祈る集い・ザビエル教会・10時
11日（土）聖書の分かち合い・教区本部・14時
12日（日）主の昇天
14日（火）聖マチア使徒
▼教区司祭会・教区本部・11時
15日（水）中野アカデミー・教区本部・13時30分
17日（金）ディーノ神父叙階記念（1998年）
18日（土）丸野六雄神父命日（2023年）
19日（日）聖霊降臨の主日
▼レジオマリエ鹿児島・谷山教会・13時30分
20日（月）ディーノ神父霊名（聖ベルナルディーノ）
25日（土）聖書の分かち合い・教区本部・14時
26日（日）三位一体の主日
▼カトリック教師の会・教区本部・15時
28日（火）司祭評議会・教区本部・14時
▼みことばを祈る集い20周年記念ミサ（レナト神父司式）・ザビエル教会・10時
29日（水）中野アカデミー・教区本部・13時30分
31日（金）聖母の訪問
▼タム神父叙階記念（2007年）

【司教日程】
1日中野アカデミー、8～10日常任司教委員会（東京）、15日中野アカデミー、29日中野アカデミー

祈りの意向
【祈祷の使徒会】
教皇　修道士・修道女と神学生の養成
日本の教会　子どもの成長

《康由神父の聖書教室》73

福音書についての考察

「福音書」というものそれ自体について考えてみたいと思います。

この書物を著すためにイエス様の生涯についての諸伝承やQ資料[1]を含めた様々な資料を単に繋ぎ合わせただけでは福音書にはなりません。福音書が福音書として成立するためには、それらが各福音記者の意図を以って編集されることが必要です。

福音書としての成立過程は以下のように図解することができます。

つまり、下図の(3)「編集」の過程が福音書を福音書たらしめていると言えるのです。このことを踏まえると福音書の理解にとって重要なことは、誰が、何時、何処で書いたのかということではなく、イエス様がどのように描かれているかということであると言えるでしょう。

ある神学者は「福音書における登場人物たちの行動様式、つまり著者が彼らに取らせる具体的な行動は、物語の中の人物に対する著者の間接的注釈なのである」と述べています[3]。

つまり福音記者とは脚本家のようなものとも言えるかもしれません。それゆえに福音書間で同じエピソードが見られたとしてもイエス様の言葉や場面設定などに細かな注意が必要なのです。

またエピソードの配置が異なっているとしたら、その伝承が持つ意味は再度、前後の脈絡から考え直されなければなりません。

なぜならそこにも著者固有の編集意図があるからです。福音書を読み解くにあたって時には注意深さが必要となるのです。

【福音書としての成立過程[2]】

(1) イエスの生涯 ⇒ (2) 諸伝承 Q資料 その他の諸資料 ⇒ (3) 編集 ⇒ (4) 福音書

1 来月参照。
2 高橋三郎『共観福音書概説』新教出版社、1980年、199頁、参照。
3 スヒレベーク（E.Schillebeeckx）（著）『イエス』塩谷惇子（訳）、新世社、1995年、84－85頁。

奄美の人々の温かさに触れた旅

小教区設立50年の玉里教会が大島巡礼

玉里小教区50周年記念行事の一環として、２月27日（火）から29日（木）まで奄美巡礼をいたしました。

参加したのは主任司祭の泉浩二神父様と信徒10人（女性５人、男性５人）のメンバーで曇り空の中、揺れる機体と共に奄美空港に到着し、２台の車に分乗しました。

個人的には約20年ぶり２度目の訪問であり、まったく知らない道のりを、先導車と隣席に座る泉神父様の誘導に任せハンドルを握っていました。

最初に約１２０年の歴史がある瀬留教会を訪れ、グレゴリオ神父様から教会の歴史、他の説明を受けました。そこから、鳥居と並んで建っている芦花部教会と、ルルドの聖マリア像がある浦上教会（大熊小教区）を訪問し、小宿教会では教会を震わすほどの声量を持つフランシスコ神父様の歌を拝聴しました。

浦上教会（大熊小教区）のルルド前で

今更ながら訪問したすべての教会の壁に初代からの主任司祭と助任司祭、そして教会出身の修道者・修道女の方々の写真が掲げられているのを驚きと崇敬の思いで見上げていました。

次の日は黒潮の森、マングローブパークでのカヌー体験、世界遺産記念館の見学、ホノホシ海岸の散策をして、夕方は大熊教会で泉神父様司式による巡礼記念ミサにあずかりました。ミサ後は大熊教会で大勢の信徒の皆さんと触れ合う懇親会があり、盛りだくさんの郷土料理を頂きながら歓談することができました。大変お世話になりました。ありがとうございました。

最後の日は、聖心教会を訪れ荘厳な聖堂を見学し、主任司祭の鈴木康由神父様としばらく近況を交わすことができました。また、ウソか真か教会のそばに立つ「１億円をかけた」と言われる公衆トイレに立ち寄ってみました。その後、奄美パーク（田中一村館）を見学し、それから玉里教会所属の有川夫妻と村田さんのハウス農園を訪れ久しぶりの再会となりました。

その後、シンボルの塔が無くなった大笠利教会で主任司祭でコンベンツアル会の内野洋平神父様から更地になった教会跡地の話などを聞いた後お別れして、喜界島を望む絶景のあやまる岬を散策しました。

この３日間、ここに書かれていない多くの方々との出会いとおもてなしに感謝すると共に、神父様と信徒の皆さんが受け継いで来られた教会の伝統と信仰の重さを感じながら帰途につきました。

奄美大島の皆さん本当にありがとうございました。

（報告・玉里教会信徒　崎山　明）

四旬節黙想会と復活祭

洗礼式もあった徳之島地区教会

徳之島では姶良教会の末吉卓也神父様をお迎えして、３月９日（土）午後６時から８時までゆるしの秘跡と講話、翌日の10日９時からはミサと講話をしていただきました。その後は、一品持ち寄りでの昼食会で締めくくりましたが、とても充実した実りの多い２日間となりました。

今まで信者としての目標や目的がぼやけていて、ただ義務感だけで教会に行っていましたが目が覚めた思いがしました。

講話では「十字架の道行き」の第１留から14留までの詳しい説明が神父様の体験を交えながらなされました。その力強い口調のお話に心を動かされることでした。加えて感動したのは、神父様のお母様がご一緒に黙想会に出席してくださり、２時間もの長い間静かに聞かれておられたことでした。

施設での宿泊ができなかったため同伴された神父様のお母様の受け入れについては信徒の向井さんの施設「こぼれ陽」のスタッフが事細かに対応してくださり、とても落ち着いておられる様子で満足気でした。

末吉神父様もお母様と一緒に生活するようになってからたくさんの気づきがあったそうで、「イエス様だったら？」と自問自答しながら、自分の弱さ、罪深さを悟ることができたと話されました。

私は日常生活の中で知らない間に、言葉で人を傷つけ、また良かれと思って取る行動が迷惑をおかけする など、自己中心に物事を進めてしまうことがあり、神父様のように「イエス様だったらどうされるか？」と考えずにおりました。

毎年迎える四旬節、目標として自分なりに40日間を犠牲の心で、祈り、節制、愛の施しなどと思いながらも、どれ一つやり遂げたことがありません。いかに自分が弱い人間なのかと、また日常生活で知人、友人、家族に対しても気づかない罪がたくさんあることを思い知りました。ですからこの２日間の黙想会は私たちの心と体にたくさんの栄養を補給してくださいました。末吉神父様、本当にありがとうございました。しっかり回心ができていればいいのですが…。

黙想会終了後に末吉神父様を囲んで

ご復活祭を迎え３月31日、平土野教会でのミサで浅間地区の浜田アキさんと息子・満さんの洗礼式が行われました。新しい仲間を迎え、またお二人の素晴らしい笑顔に、私たちも周囲の人々に信仰を伝えることの大切さと、洗礼によって希望と勇気が与えられることを感じました。

神様の愛に包まれた人の顔は輝いていることを感じ、喜びを共に、持ち寄り品でのお祝いでしたが盛大に行うことができた感謝の１日になりました。

（報告・順秀子）

要　理

復活後のイエス様と教会

復活後、イエス様が何をなさったのか、また教会にどのかが起こったのかを福音書に基づいて順序立ててお話ししましょう。

復活された後、イエス様は40日目にオリーブ山から弟子たちの前で天に昇られました。このことが主の御昇天と呼ばれています。重要なことはその前にイエス様は弟子たちのために御父の許に住まいを用意し、また聖霊を遣わしてくださる約束をしてくださったことです。

天に昇られたイエス様は御父の右に座られます。これは人間を見守るようになったということではなく、父なる神と同じ権威と栄光をお受けになられるという意味です。この「権威と栄光」の「権威」とは〝自由に何でもできる〟ということであり、「栄光」とは〝救いや贖罪の業が卓越していること〟を意味します。この二つをもってイエス様はすべての人を裁き、救いの御業を成し遂げるために再び地上に来られます。このことを主の来臨と呼びます。この時が地上で神の国が実現したしるしとなります。

イエス様は御昇天の後10日目にお約束の通り使徒たちに聖霊を遣わしてくださいました。これが聖霊降臨と呼ばれています。またこれが教会の誕生日と言われることもあります。

使徒たちはこの聖霊を通じてイエス様の教えを深く悟り、それを勇敢に宣べ伝え、諸国の言葉を語り、奇跡を行うなどの賜物を頂きました。この聖霊は常に教会の内に働いて神様の御心を教え、そして教会を正しく導かれます。また、同じように聖霊は信者一人ひとりの内に留まり、必要な賜物と助力をもって愛徳の業を実行させてくれます。ですから私たちは御父やイエス様ばかりではなく聖霊にも祈るのです。